The Japan Interior Designers' Association

JID No.75・1976.July.1

第1回旭川デザイン・シンポジウム

去る2月9日，旭川市において，はじめてのデザイン・シンポジウムが開かれたが，当協会は，この開催に当り，当初から協力を惜しまなかったが，幸い成功裡のうちに終えることが出来た。協会は，これに前后して，当地の見学会と，更に現地の家具業界を中心にした人々との討論集会を企画，インテリア産業懇話会を開き，非常に内容のある収獲を得ることが出来た。これらについて，参加された会員の方々からの報告によって，お知らせしたい。

旭川デザイン・シンポジウムについて，

2月9日，午後1時より，一面白い雪に覆われた旭川に於いて，第1回旭川デザイン・シンポジウムが開かれた。

当協会による地元へのインテリアデザイン・シンポジウムの誘いがきっかけとなり，旭川市の働きかけもあって，当地にデザイン・シンポジウム実行委員会が誕生したのが，その半年前であった。

当初は，インテリア・特に家具産業関係とのディスカッションと協会支部組織拡充の意味をもった働きかけであったが，旭川市としては，これを市民運動として取上げる又とない機会として受けとめた。今回を第1回として，これからのデザイン運動のとっかゝりを作り，それを拡げていく意味でも提起される問題の巾を大きく取り上げることになった。

あと毎年それを絞り，具体的な問題のシンポジウムに入ろうと言うことである。当協会側としては，特別委員会，及び理事会で，この問題を取上げ，協会としての当地に於ける今后の展望までを討論の結果，後援として，その企画の立案に参画する形をとることになった。

実行委員会は，旭川の全商工団体をはじめとする道内の主要な学校，研究試験所関係，そして又デザイン団体の後援，協賛を得て，準備が整い，開催のはこびとなった。

当日は1500名定員の市民文化会館は，業界はじめ，建築，デザイン，服飾関係の専門家，学生，そして一般市民がつめかけ，ほゞ満員の盛況となった。

以下シンポジウムの大要を報告しよう。

先づ，深く厚い雪にとり囲まれた冬の厳しさの中に住む旭川の人達の生活を切りひらくために，デザインに真に取組んで行くためにこの会を開催したとするシンポジウム実行委員長，北島吉光氏と，

旭川市長松本勇氏の挨拶のあと，基調講演に入った。

・基調講演　〝ファッション・ビジネスとしてのインテリアを考える。〟

ヴァンヂャケット社長 石津 謙介氏

「単なる流行ではなくて，今，自分達の生きている時代に何が必要かと言うことを，たえず考え，もっとも必要とするものをビジネスとしてとらえて行こうと言うのがこの主旨である。服装についてもユニホームのデザインをやり，食についてはオレンジハウスなどと実践しているが，その中からたえず社会の欲求をとらえて来ているつもりでいる。

インテリアについて考えれば，これは生活の全体として考えなければならない分野だと思う。現代の社会性とはどんなものだろう。価値感の変り様がまづあげられるだろう。貧富，年令，ウチとソトを外観で判断しなくなった。又，礼服と，スポーツウェアーが接近し，地域差もなくなって来た。

生活の中では，ふだん着が大きな意味をしめ，それを受け入れるニューファミリーと，そうでないオールドファミリーってみれば古い価値観のぜい肉文化に対し，新鮮なジーニング文化が育って来たと言えよう。

いわゆる，ほんもの、味をジーニングに求めようとする傾向である。白木家具，Do it yourself もその一つと考えられるだろう。

インテリアはその様な感覚で大きくとらえることが必要ではないか。」

大要以上の様な内容を，非常にユーモアーにあふれる話しぶりで聴衆をひきつけたが，次に当協会理事長の白石勝彦氏の司会に移り，以下５名のパネリストによる提案が続いた。

・北欧と北海道(旭川)―生活とデザインを結びつける

川上 信二氏（ＪＩＤ会員）

北欧のデザイン運動の中で，もっとも効果的にとり入れられた生活の中に於けるデザインの効用は，生活とデザインを考える上で日本でも充分学ばなければならないことが非常に多い様に思う。

特に，北海道，中でも旭川は風土と言い，そこに住む人達の人柄と言い，じっくりと腰を落ちつけて仕事をやるタイプで，北欧とよく似ており，いわゆる北方文化圏を作り上げるにふさわしい資質をもっている。

実用性，社会性，美しさ，この３つのよりどころをはっきりと物に反映して，よりよい豊かな生活を作り上げるために，北欧の良い面にならった生活とデザインの結びつきがもっとも大切ではないか。

・建築からみたスペース―ものからスペースへ

林　雅子女史（建築家）

自然環境はむしろ積極的に利用して行くことが必要ではないか。

旭川のこの冬の厳しさは，むしろ住む人に創意工夫を与えている。

例えば断熱材の進歩により，屋根裏のスペースが使える様になった。目的と手段を着実に見きわめることにより，スペースが有効に自分達のものになる。

・北文文化とクラフト―長い冬のすごしかた

秋岡 芳夫氏（104会議室，オーナー）

工業化社会に於けるデザインをやって来ているが，もっとソフトウェアー的な見方をすれば，工業化社会の中に於けるクラフトの意義は重要なものがある。

今の我々の生活の中に於ける物は，或る調査では7000ヶもあり，28%が使われていないと言う。この生産社会の実態にも目をむけ，クラフトの意義を，生活の中へ向ける様にしたい。更にこれからの余暇時代，そして，老後問題に対する工業化社会に於けるクラフトと言う見方で実践されて行くであろう。

・旭川のくらしとインテリア―値へのデザイン

新庄　晃氏

（東海大学工芸短大教授・JID会員）

生活とデザインの密着が今こそもっとも大切だと思う。旭川に新らしく住んで体験している者として，くらしの中からの発言をしたい。

1例として，厳しい冬の旭川の便所は未だ水洗になっていないところが多い。大変な不便さなのだが，同時に質的な遅れの良い例だと言えよう。

日常の生活の中で，きびしい目での観察が非常に重要になる。生活の本質として質を尊重すること，この観点からもう一度生活を見直して考えることを提言する。

・この風土のデザイン―北国からの発想

伊藤　隆一氏

（北海道教育大学 助教授）

北方文化圏と言えるこの風土を積極的に生かしたい。太陽と雪が一緒の国は北欧よりも優れている。北欧の歴史は7～800年だが，北海道は未だ100年しかない。自分達の住む環境をしっかりと考え，北海道を見直すことにより，更にあくまで長期的な計画で、こゝに真の意味の文化圏をつくり上げようではないか。好きな言葉に，〝雪は鉄である〟と言う言葉がある。

以上がその大要だが，このあと一時間，クラフトと人生，北方圏リサーチセンターの提案，旭川独自の家具の開拓など，活発な意見の交換があり，最后に黒田東海大工芸短大学部長の挨拶をもって閉会となった。

閉会后，地元の有志関係者をはじめ当協会からの参加者全員による懇親会がもたれ，有志の郷土色豊かな手料理に舌づつみを打ちながら，熱気あふれるシンポジウムの余いんをいつまでも楽しんだ。

インテリア産業懇話会について，

当初からの当協会による地元の業界との膝を交えた話し合いをやりたいと言う願望は旭川デザインシンポジウムの開催丈では満されないことが予測されたので，当協会主催による地元との懇話会を開催した。

2月10日午后1時より，地元，木工振興協力会の設営になるニュー北海ホテル凌雲の間に於いて行なわれた。

地元からは，協力会会長の岡音清次郎氏をはじめ，メーカー及び流通関係の社長はじめ担当者，そして試験所関係者等60名ほどの参加者を得，協会員は，以下4つのグループ，即ち，需要，デザイン，生産，供給に夫々別れ，更に座長としてのチーフとアシスタントを決め文字通り，膝を交えて，夫々の問題点を話し合った。

会は，川上氏の司会により，白石理事長の挨拶にはじまり，各部会に分れてディスカッションに入った。予想以上に熱気ある雰囲気で会は盛り上ったが，2時間后各チーフによる報告に入り，更に全員による討論を行なって正味3時間の会を終った。

最后は新庄氏が，協会との今后の連けいを約した閉会の辞で散会した。

以下，各部会のまとめを夫々のチーフ，アシスタントの報告でお知らせしよう。

（川上記）

Aグループ

需要――消費者の動向

チーフ　渡辺　優

アシスタント　西沢圭三

第1のグループである需要については，仲々その内容から構成人員が最初は少なかったが，後に漸増した。しかしやはり，それがわかれば苦労なしではないが，本当の意味での需要の本質と言うか「需要動向の把握」についても，使う人即ち生活者の求めているものは何か，と言うことになり，それはデザインが製造，そして販売とつながりを持ち，一言で言える結論が大変難かしいことである。と言う声と共に，それなれば故に，より一層の研究と調査が必要であるとの話が最初に出た。そしてそれから話が展開してゆくと，

1　本州への移出即ち，旭川家具の定着度が落ちている。

それは動向の把握が悪いのではないか，――その一例として，旭川家具の寸法が少々大きいのではないか，と言う具体例があげられた。

2　過去のもの〉リデザイン，及びマネものデザインが多すぎるのではないか，

それについて，もっとクリエティブなデザインが必要である。それについて旭川の関係者がグループをつくって調査をすべきであろうと言うことになった。

3　スペースと家具の大きさについて，

都会化住宅のスペース調査をもっとやれ，例えばショップなど広いスペース等では自宅と較べると，約20%も大きく見える等の具体例が出た。

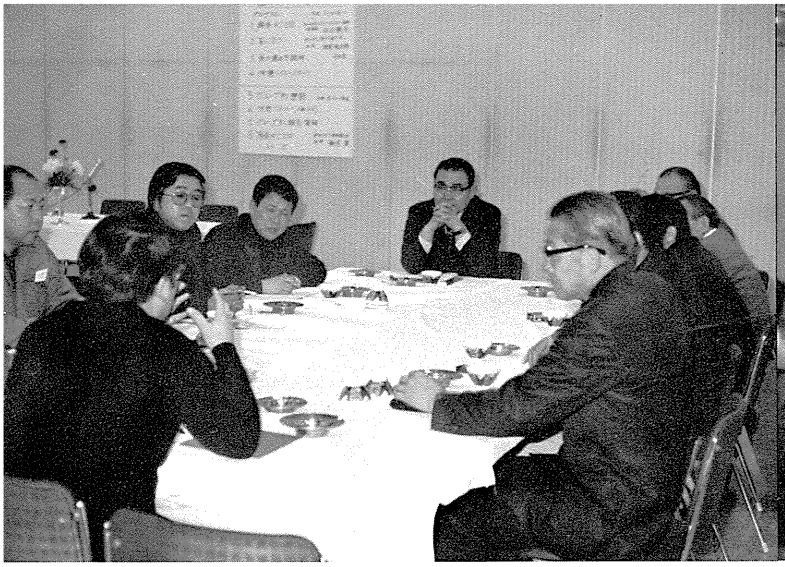
4　其の他フリーの話し合いになり，その結果として，時間の制約のため少し無理な結論として，

・家具以前の問題から話が出た。

・メーカーは需要調査をしていない。

・若い層には積極性があるが，商社の意向をメーカーが鵜のみにしているのではないか。

・生活の個性化に対して，やはり主張



Aグループ　需要

Bグループ　デザイン

のある提案，即ち，インテリアを綜合的に考えること。

以上の結論の主張展覧会をやるべきである。と言うことになった。

更に，生活者と，デザイナー，メーカー，問屋，販売者の新らしい話し合いによる反省と実践と言う結論になった。

Bグループ

デザインと社会的役割

チーフ　榎田　均

アシスタント　森谷延周

構成は市内のメーカー・指導所・問屋等のデザイン部門又は商品企画に所属する若手スタッフ計18名で，直面している問題点もしくはなやみ等を軸に討議が運ばれた。

1．製品のオリジナル性と商品寿命

日本の流通面では独創性や漸新性を打出した製品でもそれが必しもブランド商品として永続性を保証されるとは限らない。市場競争の激しい製品では商品寿命がますます短くなり，従来3～4年のとめ柄製品でも，せいぜい一年，目先を変へる商策の一つとして惜しまれながらも短命化されてしまう。

地元流通関係者の報告では，加飾の変化を要求される単品物では最もこの傾向が強く，リビング，食堂セット等トータルデザイン商品が単品物とは逆に安定しているようだと述べていた。このような地域的現状の中で，若手デザイナーは流行ピッチの短命化，良いデザインとは，ユーザーの指向性は，そのジレンマはつのるばかりだと訴えている。

2．業界と指導機関

前述の訴求に対し，若手スタッフの寄り処は市の指導所や大学の研究室である点から，目下「生活の為の家具」をテーマにいろいろの角度から研究試作を進め研究会等を通じ交流を計っているとのこと。また研究開発した製品の市場での反響なり追跡調査が出来ず，成果の把握に困ると述べられていた。

こゝで流通販売面からのニーズを製品に正しく反影させるため，メーカー側も，もっと勉強する必要があろうと次の三点が指摘された。

1）問屋まかせではない独自の消費動向調査の必要性，

2）流通面の情報を消化発展させるメーカー側の態度是正，

3）地域的特色の明確な分析とその活用，

3．ニューファミリーの思考

旭川産地では次期作品展の共通課題として「ニュー　ファミリーを対象とした製品」がテーマに挙げられている点から討議に折込んだ。まづニューファミリーの定義がよくわからないが，長く使いこなすことで味の出て来る家具，言いかえればニューでなくオールドとして位置づけされるもの。もう一人は，「人間が家具に使われるものではなく使いこなすべきもの」と夫々良質で生活に密着しあきの来ない製品をと主張していた。

（参考）流通分野ではユーザーを世帯歴別に三つに区分する方法を用いている。

区　　分	世帯歴	適　　要
ニューファミリー	0～10年	ヤングカップル又は乳幼児持ち世帯
ベターライフ	10～20年	中学高校生持ちの40代世帯
クオリティーライフ	20年以上	50才台以上のオールドカップル

4．旭川家具の特色

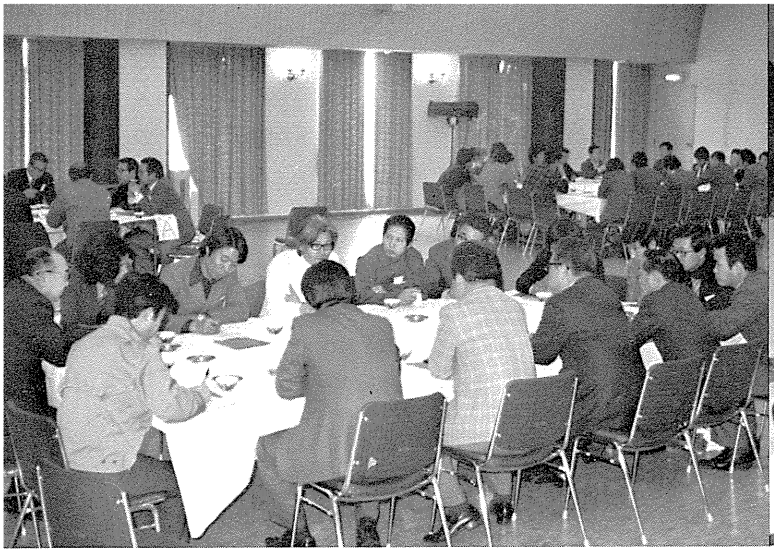
北海道民芸家具，旭川家具として脚光を浴びるようになり，夫々の熱意はわかるとしても未だ，やぼったさ・生産流通面の前時代性など問題は多々あるようだ。地域産業の特色づくりで第一には，道産材の効果的活用が挙げられる。他地域では入手し難いホワイトオークの利用，小茎木から松，無垢材の活用（ソリッド材のもつ味わい，組手接手の効果的強調，彫刻の活用，仕上なども含め）を計ってゆくことであろう。

とはいえソリッド以外は使うなという意味ではなく，フラッシュ，ランバーコアーなど適材を適所に活すことは当然のことである。

5．企画部門の充実

たとへ材料・加工技術が優れていても企業に有能な企画マンが不足していたらこれからの企業発展に致命的な問題となるであろう。

デザイナーも単なる図面書きに終始することなく，次期製品の骨づくりや組織づける企画力なくしては明日の旭川家具は語れないであろう。近ごろの考え方では，単品家具からトータル化されたイン



Cグループ　生産

Dグループ　供給

テリア製品へと指向し，綜合性が最も重要になってきている。

こゝで一つの方法としてメーカー内部の力と外部ノウハウ（デザインコンサルタント）を結びつけ新たな要求に挑んではどうか。さらに流通面の場合単品ものならいざ知らず，綜合商品を想定し，メーカー側が独自で，或は共同で展示場も含めた販売ショップを持つ必要性が一層強くなるであろう。

Cグループ

生産――開発と発想の展開

チーフ　垂見健三

アシスタント　田中　博

1．一般的な現状

生産ラインが各メーカーともに類似しているためかデザインも含めて製品の質が一元的な傾向にある。

2．メーカーのイメージ

上レベルにあるメーカーは，モダンデザインを中心にしてトータルデザインへの指向がみられ，ポリシーが明確になっている。

中レベルのメーカーは，スタイリッシュなデザインを中心に生産をしているが，個性をだすためにいろいろと模索している。

下レベルのメーカーは主体性がみられず他社のコピーにたよっている。

以上3タイプのパターンがみられ，とくに中，下レベルのメーカーに問題点が大きいようである。

3．地域性

デザイン面では，地域性のなかにある要素をひきだして活用していない。地域性のなかでの発想を一般的なものに発展させる。また，地域性の中からの特殊なキャラクターをうちだす。地域にあうもの――地域そのものをみなおす――を考えるなど，足元を再認識することが重要ではなかろうか……。

流通面では，旭川の地域的な条件の問題として製品のデリバーリーに時間がかかることがあげられた。これは別の面からみれば，現状の製品は都市指向的であることも一つの因となっているものと思われる。

この問題と関連することの一つとして，生産サイドの資材調達（とくに金物，張地など）の面でも非常に能率が悪いことがあげられている。

4．素材

素材（たとえばナラ材）に対する偏重があるのではないかの疑問があり，活用法は進歩しているが，素材供給の長期計画に対して家具メーカーサイドからのアピールが必要である。素材偏重が製品の質の一元的傾向にも反映されているといえよう。

5．技術

木材加工の技術のレベルと，他の関連する技術――金物，張地など――に格差がみられ，とくに金物類に明確にあらわれていて，しかも製品全体の質に大きく影響する。

6．品質

製品の品質維持基準の必要性が強調された。これは国全体の問題としても重要なことであるが，旭川の地域性との関連において，もっとも適した方法をとることも考えられ，しかるべき機関を設けて運用されることが望まれる。

これは，運用を誤まると権威が権力につながりかねない面があり，維持基準の運用機関の構造について十分検討されるべきである。

Dグループ

供給――物と心を売ろう。

チーフ　三宅征郎

アシスタント　長堀映司

供給を辞書で引くと，要求に応じて提供すると出ている。つまり消費者ニーズを，いかに早く的確にとらえて，新らしい商品を打ち出していくかと言う様な事から話し合いに入り，参加各氏より，次の様な意見が出た。

1．旭川の場合，メーカーは問屋経由が多いので，問屋から消費者ニーズに関する情報が入りにくい。

22．消費者ニーズについての情報が入っても，メーカーはそれを商品開発する努力，それを売る努力が，たりないのではないか。

3．家具が2～3年前から大形化しているが，メーカーの経済性丈で大形なものを作っている傾向がある。

4．家具は，その地域で持っている材料，労働力，経済性などからデザインが生れるのが本当ではないか。

5．箱物の市場価格はサイズによって決まる傾向があるため，品質の上下によって標準仕様の様なものを作ったらどうか。

6．住宅の部品化が進んでいる現在，インテリアと建築がバラバラで，壁面収納家具にしても，使いにくい等の問題が出ている。

7．消費者ニーズと言っても，東京，大阪等，地域による違い，同じ東京でも百貨店，専問店，小売店等，店による違い，更に細分化すれば，人間個人による違いがあり，大変とらえにくい問題なので，これらをまとめて結論を出すことは難かしい。

又，仮にまとまった答えに合せて商品を企画しても，その最大公約数的な商品を全国に流して売っても，平均的に売れるわけではないし，全国的に売る流通経路すら持っていないメーカーも多い。

したがって，今後は小売店とメーカーをダイレクトに結びつけて，商品開発が出来るプロモーターが必要であり，その役目をデザイナーがするのか，メーカーがするのかはわからぬが，従来の作ったものを売る時代から，売るものを作る時代に変ることが，メーカー本来の姿ではないだろうか。

以上がこの会議で抽出された大体の意見である。

この会議では結論的なものは出なかったが，旭川の人々は，こうした会議をまた開いてほしいと言っていたし，その地域の人と話すことによって，その地域の悩みや，希望を知ることが出来たし，インテリアデザイナー協会として，又，デザイナー個人として何が出来るか，何をすべきかを問いかけられている様であった。

旭川家具産業の概況

北海道のほぼ中央にある旭川市は，大雪山連峰に囲まれ広葉樹集積地としては日本一という家具産業には恵まれた環境にある。

昭和30年頃より道産材の活用開発として家具づくりが始まり，最近では民芸調も加わり，旭川家具として中央市場を始め関西，東北等各地で認められるようになった。

昭和49年の調査では、企業数95社，従業員2,500人，総出荷額135億円といわれその55%は道外移出（74億円）されているといわれている。

しかしスチール家具や脚ものは内地よりの移入が大半をしめている。

冬の旭川巡り

去る2月8日，JAL505便は一行10数名を乗せて旭川へ飛ぶ。機内には旭川デザインシンポジウム・パネリストの秋岡芳夫，林雅子さん司会役の白石勝彦さんも同乗している。氷点火20度という旭川の寒さを耳にしてどの程度なのか，足元が滑るので履物の心配は，帰りにはスキーを楽しんできます等々機内の話題は様々。

今回の目的は，初めて開かれる旭川デザインシンポジウムに参加，そして家具の重要産地である旭川の現状と将来を語り合うこと。加えて歴史ある諸施設の見学というかなりハードなものである。

車窓から白一色を眺めながら，バスで千歳から札幌に入り昼食，そこから旭川に向けて急行大雪に乗り込む。時折強く降る雪の中をひたすら走ること2時間,「旭川，旭川」のアナウンスが流れ駅に降り立つと,真白い息が寒さを教えてくれる。駅では会員・新庄晃，竹沢秀夫さん，旭川市商工部の方々の出迎えを受けマイクロバスに乗り込む。ホテルに荷物を置いた私達は，まず市立旭川郷土博物館を尋ねることにした。ここは林に囲まれた静かな環境で，建物は明治中期の木造洋風建築を昭和43年復元改修したもの。内部には北国の自然，開拓と生活道具を物語る貴重な資料等が収集され，北海道の歴史を知ることができた。見学後,旭川市の中央に戻り平和通りの買物公園に行く。この珍らしい名前の買物公園は，当時1日15,000台の自動車が走る国道を公園にしようという構想からスタートした。人々はブラブラ歩きながら両側に並ぶ商店のウインドウを眺め，ベンチに腰かけてクリームをなめたり，話し込んだり，そう，鳩も飛んでくるかも知れない……このユニークな街にしようという発想は昭和38年我国で一番若い市長として誕生した五十嵐広三さんから始まる。

私達が着いた8日は旭川冬まつりの最終日とも重なり，買物公園と近くの常盤公園を会場に，雪と氷の彫刻を見ることが出来た。

到着第一夜の夕食は，旭川デザインシンポジウム実行委員長・北島吉光さん主催による,ジンギスカン料理に舌鼓を打つ。パネリストの石津謙介さんも交え，焼酎で一杯やるこの料理は格別であった。夜も更けると凍りついた路面の上を，雪が渦を巻いて舞い上る。

明けて9日，私達は厳寒を覚悟して旭川を訪れたが比較的暖かい。

旭川の木工団地は大きく豊岡と永山に別れるが，時間の関係からまず豊岡の木工団地周辺をドライブし，一路，アイヌ民族文化の一端を知るためアイヌ記念館へ足を運ぶ。ここは今年86才を数える川村カネト宅と併設の記念館である。休館のところを特別な配慮により川村さんと対面できた。独得の顔立ち，独得の衣装，足には長靴を履き，一段高い所に立ってアイヌ人の生活，北海道の測量,黒い唇,

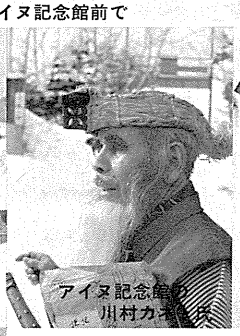
お墓の形等々に話は及びそして最後に，私の娘の１人は東京に嫁いで行ったが，皆さんどうかよろしくと話は終った。そして私達は次の訪門先として，革新的・精力的な仕事で知られる永山のインテリアセンターを尋ねることにした。インテリアセンターでは専務の長原実さん，会員でもある田中博さんの案内で工場とショールームを一巡する。旭川家具のオリジナルを求め，また木材の生命を活かし，機械と手による味をモットーとしている様子が伺えた。長原さんは，この機会におおいにディスカッションできることを望んでおられたが，時間を充分とることが出来ず残念がっていたが私達も同様である。

雪景色と除雪車を横目に，マイクロバスはエルムユーカラ織民芸館に到着する。ユーカラ織とは，北海道の生命を染と織に託して作る手織つむぎであり，先住民族が伝承してきた文様文化をもとに，緬羊の毛と亜麻を使いまさに手仕事の結晶といえるもの。館内には製品化された，ショール・ベスト・テーブルセンター・バック・ネクタイ・しおり等が展示即売されていた。ユーカラ織をあとにした一行は午前中のハードスケジュールから開放され昼食をとる。そして午后は旭川デザインシンポジウムに参加した。（その様子は別稿をご覧下さい）

明けて10日，外には時折雪が舞う。天候に恵まれそれほど寒さは感じられない。今日の見学のトップは，豊岡木工団地の代表の一つ上川木工を訪れる。旭川家具の匂いのする工場を一巡后，上川グループの会長と同時に旭川家具事業協同組合理事長でもある岡音清次郎さんにお目にかかった。岡音さんはニューファミリー指向を中心とした最近の旭川家具の動きについて，また今后の在り方を指摘されると共に，午后に予定されているインテリア産業懇話会を一つキッカケとして良い方向を見つけ出したいと熱っぽく語っておられた。マイクロバスで廻る道中は昨日に引続き，旭川市木工芸指導所の石黒勉さんが親切丁寧に案内してくださっている。そしてバスは石黒さんの勤務されている木工芸指導所に着く。この指導所は元所長の松倉定雄さんの時代から熱心な研究と指導力で数々の成果を示してきたところである。ショールームにはこれからの生活を前提に多種の家具，小物類が試作展示され，また過去には何点かの家具が製品化された実績もあるという。

アイヌ記念館前で

東海短大屋上で旭川を説明する新庄氏


アイヌ記念館
川村カネ氏

ユーカラ織民芸館の窓

集積される道産機

次の訪門先は北海道立林産試験場，パネリストの伊藤隆一，林雅子さんも途中から加わる。この試験場は，北海道の木材資源の高度利用開発研究及び，木材産業の振興と発展を図るため設立されたユニークな活動機関である。そして最近では脱脂から松材に関する研究，多種の合板の難燃処理研究，２×４建築に関する研究など益々その成果が期待され，また旭川家具業界とも密接な関係にあるという。この素晴しい研究施設をあとに，見学の最后は会員・新庄晃，黒岩靖司さんの勤務する東海大学工芸短期大学に着く。新庄さんの案内でまず校舎屋上に上る。この学校は高台にあるので，ここからは雪で覆われた旭川の全貌が手にとるようによくわかる。丁度，学生の卒業制作作品が昨日提出され，先生も学生もホッとしているという。学校内の諸設備は大変充実しているように見受けられるが，松倉定雄教授はまだまだと語る。私達は旭川の専門教育のメッカとして，また次の時代の新しい人間育成の場として同校の発展を祈りたい。

同大学見学后は市中に戻り，本場のラーメンの昼食をとり，午后に予定されているインテリア産業懇話会の会場に入る。（その様子は別稿をご覧下さい）そして懇話会終了后は現地解散とし，今回の旭川巡りを無事終った。

参加者は会員19名，デザインシンポジウムのパネリストの石津謙介，秋岡芳夫，林雅子，伊藤隆一さんを加えた23名であった。

森谷延周

日本丸の見学

3月28日（日）運輸省航海訓練所の大型帆船“日本丸”(2.257t）の見学が行なわれた。海洋日本の象徴である同船はアメリカ建国200年記念の帆走会に参加のため4月15日実習訓練を兼ね乗り込んだ東京・神戸両商船大学生を乗せ東京晴海を出航した。同船は昭和5年に造られ世界二位の大型帆船とのこと。(もう一隻“海王丸”がある)

世界25ヶ国から集る帆船200隻と共に，7月4日アメリカ独立記念日にニューヨーク港で行なわれる。恐らく今世紀最大でしかも絶後のパレードになると思う。消ゆくSLにも似たノスタルジー・ブームのクライマックス！（昨年イギリスにてSLのパレードが行なわれている。)又見物の人々は独立時の精神にかえる事が出来るだろう。

今度の航海に先き出ち改装を一部したとの事だが甲板は60㎜厚のチークラムクとの事，又弾丸が工事中出て来た話を伺い，あの戦争を乗り切り，此の姿を見られた事は戦中派の自分には感激をおぼえざるを得なかった。

見学人員が少数に限られたので参加出来なかった方もあられたと思う。

船の見学は前回昭和46年2月に日本カーフェリー㈱“フェニックス号”の見学以来だと思う。今回の見学会には会員・西沢圭三氏に大変お世話に成った事を附記します。

鈴木栄二

豊口克平の叙勲

豊口克平には48年間にわたるインテリ，アデザイン界ならびにインダストリアルデザイン界に対する多大の功績により，去る4月29日付をもって勲三等に叙され，端宝章を授与される旨発令，5月12日伝達式，同13日ご夫妻お揃いで宮中に参内，春秋の間において拝謁の栄に浴されました。

さきに，故剣持勇の叙勲がありましたが，在命中のデザイナーとしての叙勲者としては始めてのことで，誠にお目出度い限りであります。

当協会としても，これに越した光栄はなく，ご同慶にたえないことであります。

あわせて，このことについて，種々ご高配をいただいた向に対し厚くお礼を申上げます。

宮本勝康	転居	〒116 荒川区東日暮里1-25-9
箕原　正	事務所移転	〒184 小金井市桜町1-3-21　電話0423(81)1935
杉本真二郎	転居	〒182 調布市富士見町4-2-20電話0424(87)4957
飾磨淳吉	転居	〒653 神戸市長田区花山町2-1-1163　電話078(691)8207
村田清包	転居	〒277 千葉県我孫子市根戸1158-72　電話0471(84)6326(82)4071
大和保雄	勤務先変更	川島織物東京営業所　電話581-4511 〒100 千代田区永田町2-14-2山王グランドビル
近藤　均	事務所名変更移転	株式会社厨有無設計事務所　電話402-6689 〒107 港区赤坂8-11-21乃木坂マンション205
若園　晃	勤務先変更	愛知県商工部商業貿易課
中村　真	転居	〒192 八王子市長沼町587　電話0426(42)4576
船越信雄	移転	自宅　1441 MOMTGOMERY #6 SANFRANCISCO CAL 94133 TEL415-982-3236 会社　301 GILLERT BLVO DALY CITY CAL 940N TEL755-1602
ハック	社名変更移転	ホウトク販売株式会社 千代田区神田和泉町1-277　（東京都及び03略）

■賛助会員

朝日木工(株)豊川工場
(株)コスガ
(株)天童木工東京支店
飛驒産業(株)
富士ファニチア関西販売(株)
ネコス工業(株)
古川工業(株)
(株)ホウトク
フランスベット(株)
(株)オリエンタル中村百貨店
(株)大丸装工部
国際インテリア(株)
(株)モダン・ファニチャー・セールス
日本総業(株)（エアボン）
クラレインテリヤ(株)
(株)ホクサン
(株)木村屋
三好木工(株)
愛知(株)
(株)コトブキ
セミカインテリア
住江織物(株)東京支店
トーソー(株)
長谷虎紡績(株)
藤井毛織(株)東京事務所
内一商事(株)東京営業所
(株)カワキチ
(株)サンゲツ
アイカ工業(株)
東洋ゴム工業(株)
富国(株)
(株)高島屋
(株)高島屋東京支店設計部
(株)ニック（NIC）
(株)ハヤミズ家具センター
揖斐川電気工業(株)建材事業部
(株)トップトーン
(株)佐野紙芸インテリア事業部
東濃陶器(株)
(株)アイ・エム・エス
(株)日建設計
(株)カフアドハウス
(株)竹中工務店東京支店
(株)ファースト東京支社
(株)商園
(株)小川商店
(株)川島織物東京営業所
(株)東光堂書店
松下電工(株)
ヤマギワ電気(株)
共同通信工業(株)
(株)新宮商行東京支店
(株)フジエテキスタイル
(株)アルフレックスジャパン
中央設備エンジニアリング(株)
日本ビクター(株)デザイン部
内外木材工業(株)東京支店
同社東京支店分室
(株)三平興業装飾部
共同印刷(株)
ホウトク販売(株)
鹿島建設(株)建築設計本部
山田照明(株)
(株)森　伝
(有)ビイジアルブレーン
(株)武藤精密
(株)海　市
浅野産業(株)
MAAM　INTERIOR
寿屋木工(株)
昭和エフキヤスト(株)
ロイヤル(株)
(株)西武百貨店家具装飾部
西和インテリア(株)
(株)北新合板製造所
ユニオン装備工業(株)
日本板硝子(株)東京支社
帝人リビングシステム(株)
(株)カスタムインテリアデザイン
ワコールインテリアファブリック事業部
立川ブラインド工業(株)
光建産業(株)
日本鉱業(株)

編集後記　協会の体質の確立や会員間のコミュニケーションに役目を果してきた会報も、時代と共に直接社会に発言することが必要とされ始めています。

年間12回発行を基準に、委員一同内容検討を続けている此の頃です。

一層のご協力をお願いすると共に、前年度の委員の方々に感謝の言葉を送ります。

泉　修二

no. 75 1976.July.1

会報委員〔東京〕泉　修二　光藤俊夫　山岸柾史
長谷川六　長堀映司
〔関西〕中村隆一
〔中部〕林　寅正　八代美代子
宇賀敏夫　安藤　清
〔九州〕中川千年　香月寿一　堤　久夫

機関誌・JIDNO.74
発行人――白石勝彦
担当理事―川上信二
編集人――JID会報委員会
発行所――社団法人日本インテリアデザイナー協会
住所――〒150 東京都渋谷区神宮前2-3-16
建築家会館3階
電話――03(403)3649
発行日――昭和51年7月1日
印刷所――広洋印刷株式会社
定価――300円
振替――東京・76389